今津・新旭スポーツ少年団空手道部が好成績！

5月21日(日)滋賀県立武道館で開催されました、第6回滋賀県少年少女空手道選手権大会において、今津と新旭のスポーツ少年団空手道部が好成績を収められました。

優勝、準優勝された方は、来年3月に千葉県銚子市で開催される全日本少年少女空手道選手権大会に滋賀県代表として出場されます。ご健闘をお祈りします。

●形競技

1年生男子
優　勝　野田　一成（新旭）
3年生男子
準優勝　河原田大生（新旭）
4年生男子
3　位　野田健太郎（新旭）
4年生女子
3　位　古川　美和（新旭）

●組手競技

1年生男子
優　勝　野田　一成（新旭）
3年生男子
3　位　遠藤　静也（新旭）
4年生男子
準優勝　野田健太郎（新旭）
3年生女子
準優勝　澤田　虹歩（今津）

（市民スポーツ課）

第44回 優秀農家表彰

京都新聞滋賀本社主催による優秀農家の表彰式が、6月8日(木)に滋賀県庁(大津市)で行われ、高島市からお二人の方が受賞されました。おめでとうございます。

これからも、お二人には市内の模範農家として、益々精進されることを期待しております。

棟方千二郎さん

小島秀喜さん

◆滋賀県農業会議会長賞・京都新聞社賞受賞
棟方千二郎さん（今津町）

今津町深清水は、県内最大の柿の産地として知られていますが、柿の価格が低迷する中、棟方さんは早くから多樹種の果樹栽培に取り組まれなど、完熟した果物づくりと直売による安定した経営をされています。

また、環境こだわり農産物認証制度についても、地域で最初に取り組まれた一人であり、果樹園で除草剤を使用しない栽培を行うなど、環境に配慮した栽培に積極的な取り組みをされています。加えて集落農業組合長の経験も豊富で、地域のリーダーとしても活躍されています。

◆滋賀県農業機械化協会長賞・京都新聞社賞受賞
小島秀喜さん（安曇川町）

小島さんは、市内でいち早く、水稲と花きの複合経営に取り組まれました。特に菊では、収穫時期の異なる露地とハウス、輪菊と小菊などの組み合わせを工夫することで、5月から12月まで継続的な出荷を実現するなど、長年安定した農業経営を営まれています。

また、安曇川町パイオニアクラブの会長や認定農業者の組織である「安曇川ファーマーズクラブ」の会長を務められるなど、地域のリーダー的役割を果たされています。

（農業振興課）

大学生がメニュー開発にチャレンジ！

高島市の魅力のひとつに「食」があり、四季折々の農産物や川魚などの地域素材を活かした伝統料理がたくさんあります。それらを掘り起こし、レストランのメニューを開発する取組みに、2人の大学生が挑戦しました。

京都市と松山市から来た大学生は、高島市の食材や調理方法について調べ、地域の方々を取材し、「バイキングメニューに合う料理は何か」、「塩分を控えめにすることはできないか」など、試行錯誤しながらメニュー開発に取り組みました。

インターンシップの最終日に開催された成果発表会では、学生の手作りによる料理が並べられ、小アユの南蛮漬けやアドベリーを使ったプリンなど、高島ならではの食材をバイキングメニューにアレンジした料理が提案されました。また、レストランを訪れた方に楽しんでもらうための仕掛けについても提案がありました。

これら、インターン生による取材内容や開発したレシピは、今津総合運動公園内にありますレストラン「ひだまり」のメニューに取り入れられています。

豊かな自然や文化を活用した事業を起こしていく場として、若者たちに対しても、挑戦できる場を提供していくことで、「チャレンジできる高島市」をつくっていきます！

（営業開発室）

市長日記

第10回「琵琶湖周航の歌」音楽祭合唱コンクールは、9府県から29組の参加で、市民会館も有料入場者でほぼ満席。驚いたのは、1番手に登場された「人生これから」合唱団です。マキノ、今津、朽木からなる140人のお達者団員がお世辞抜きで素晴らしい合唱をされました。色とりどりのTシャツが舞台照明に映え、皆さんの表情の素敵なこと。2番手の今津少年少女合唱団の澄んだ歌声と豊かな表現も流石(さすが)。個の努力と集まる気持ちが見えるようでした。健全な緊張感はよいホルモンも出るとか。

「湖西の地は池に美しき鯉が泳ぎ、森には生命の気配が濃厚で、文明の虚飾に彩られた東京など吹っ飛ばしてしまう魅力にあふれていたが、それを下手に文脈付ければ結局過去多くの観光地が繰り返してきた俗化の道を辿ることになる。人生の多くのことは寸止めで味わうしかない」

これは6月に行なわれた第2回日本再発見塾の講師、脳科学者の茂木健一郎さんのブログ「クオリア日記」に記された一節です。

茂木さんは帰り際に「子どもを連れて来たい」と、歩きながらパソコンを打っておられましたが、「すぐ消費されてしまう田舎の語り方から抜け出せ」と話されたことが心に残りました。

都市は文化も資源も人も消費します。家元や達人が揃って案じられている「30年後」への想いや、文化や資源を生み出す現場・原点への想いが今回の日本再発見塾となりました。

黛まどかさんによる吟行の最優秀句には「泥落(どろと)しの　田に六月の　風光る」が選ばれました。この句は「泥落し」の「地に足のついた語感」に国文学者の高橋世織さんがいたく感動され、全体会で地元長老が解説してくださり150人の参加者に響いたことから生まれました。「言葉は究極のメディアであるから、命がけで高島を表現する努力を」と宿題がでましたが、集落掲示板の「泥落し休業」を感じるセンスも教えられました。唐突ですが、マキノの「やんせ」はイケてますね。

フナ寿司。原木しいたけの薄塩炭火焼き。「下流を思い遣って、上流を信頼して生きてきた」という水を汚さないことが当たり前の暮らし。高島の普通は、とても上質であり豊かです。古屋の六斎念仏踊りの、テレビで味わえない存在感と緊張感は別格でした。

びわこ里山観光特区の筋道は、高島文化の追求と物語性にあり、そして5万6千人の口が何を語るかで決まる。「高島ってどんなとこですか？」

海東英和　拝

シリーズ 環の郷(わさと) 高島を目指して その六

琵琶湖とつながる田んぼ、そして人

◆琵琶湖と田んぼはつながっていた

水の流れは、河川や水路を介して、山から田んぼ、そして琵琶湖へとつながっています。

かつては、琵琶湖に棲んでいる多くの魚が田んぼで産卵をし、ふ化して一定の大きさになった稚魚が琵琶湖に帰るという生態を保っていました。しかし、人間の生活を豊かにする施設ばかりを優先したことなどにより、今ではその姿をほとんど見ることができなくなりました。

現在市内では、休耕田を使って、魚も琵琶湖や田んぼを自由に行き来できる環境を取り戻そうと、「高島市うおじまプロジェクト」という取り組みがなされています。その成果があって、今年も休耕田には多くのフナやドジョウが遡上し、稚魚なども確認されています。

◆生きものが計る安心・安全

魚の住む環境を取り戻すことと併せて、農薬や化学肥料の使用を減らすなど、環境と農業とをつなぐ意識が高まりをみせ、市内でも、「環境こだわり農業」への取り組みが年々拡大しています。

近年、生きものが多いことが生産物に対する安心と安全の指標(生きものがブランド)と考える動きが広がっており、こうした環境への取り組みが、農産物の付加価値を高めることにもつながっています。

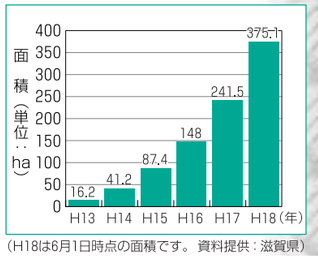
市民をはじめ京阪神の人々の飲料水をまかなう琵琶湖の水環境を考える上で、「生きものが育つ環境を守る」という活動は、川の上流から下流へ、また、生産者から消費者への「心遣い」にもつながってます。

◆環境がつなぐ産業や都市とのつながり

京阪神をはじめとする多くの消費者に、高島産のこだわりある農産物を積極的に買っていただくことは、この環境を守っていくことにつながります。

買ってくれる人がいるからがんばって生産する。その上、環境も守れるという地域農業が、いつまでも続けられる関係をつくっていきたいと思います。

高島市における
環境こだわり農産物栽培面積の推移



（H18は6月1日時点の面積です。資料提供：滋賀県）